京都大学	博士（文学）	氏名	中村　慎之介
論文題目	高麗前期仏教政治史研究		

（論文内容の要旨）

高麗時代（918-1392）の朝鮮半島では仏教が盛行した。王朝は禅宗もしくは華厳宗・法相宗の高僧を国師・王師に任命することで仏教を国制に組み込んだ。高麗史は、武臣のクーデターにより毅宗が廃位される 1170 年を境に前期・後期に分かれるが、本論文は、高麗前期を仏教関連諸制度が完成した時代であり、遡って新羅時代、降って高麗後期・朝鮮王朝時代に研究を進めるための起点と位置づけた上で、王朝と仏教界を媒介するものとしての国師・王師に焦点を当てつつ、高麗前期政治史における仏教の政治的役割を考察するものである。

本論文は序論および本論四章から成る。

序論は、（一）関心の所在、（二）先行研究の整理、（三）先行研究の構造的問題点と本稿の立ち位置、（四）各章の概要、の四節から成る。

第一章「王師任命と高麗の外交関係―円空国師智宗の生涯」では、高麗前期の仏教制度が整備された光宗～顕宗の時期に活動した禅僧の智宗に注目し、仏教と高麗の政治との関わりを整理する。

第一節では本章のキーワードである王師について、先行研究で明らかにされたところを批判的に検討する。王師は高麗独自の仏教制度であるが、従来の研究で指摘された王師の機能とは単に高麗王朝が高僧に求めたものに過ぎないことに注意を促した。

王師・国師が同時に任命される事例を検討すると、王師・国師を一つの宗派で独占しないよう配慮されていたことが判明する。さらに、華厳宗から王師か国師が任命される場合は奉恩寺で、華厳宗から任命されない場合は内道場で任命式が実施された。このことは、王朝と仏教とが密接な関係を保っていた高麗の時代的特徴を反映していよう。

そして、事実上の高麗仏教界のトップである王師の任命に関しては、高麗の外交関係と一定程度の相関性が見られることを指摘した。

第二節では一次史料である「智宗碑文」に基づいて智宗の一生を概観し、智宗が師事した僧侶についても整理することで、当時の人的交流の一端を復元する。高麗の外交関係と王師任命に一定程度の相関性が見られることから、高麗が置かれた国際情勢にも配慮しながら王権と仏教のあり方を考察した。

第三節では、光宗～穆宗代における高麗の外交と仏教についてそれぞれ整理する。光宗は後周と北宋に事大し、安定した国際関係のもとに中央集権化を図った。こうした状況が変化したのが、成宗代における契丹の侵攻である。契丹の武力行使に屈した

高麗は北宋との事大関係を清算し、契丹に事大した。この時の智宗の活動と高麗の外交関係とを整理する。

第四節では、顕宗の即位に至る時代背景を整理し、次いで智宗の王師任命前後から死後にかけての高麗の外交と仏教とを概観する。幾度かの外交交渉の後、高麗は北宋から契丹へと事大先を変えることとなる。これと期を同じくして、法相宗の法鏡が王師に任命された。以降、智宗を最後に約八十年間、禅宗から王師が選任されなくなり、華厳宗と法相宗から王師が選任されるようになる。対契丹戦時体制の解除と法鏡の王師任命に至るまでの高麗の政治・外交史を整理し、高麗の外交方針と僧侶の登用の相関性について示した。

第二章「高麗における王室出身華厳宗僧侶への国師号追贈の慣例成立について」では、高麗王朝と仏教の相互補完的関係を端的に示す事例として「王位を継承しない王族が出家して華厳宗僧侶となり、入寂直後に高麗仏教界最高の名誉称号である国師号を追封される慣例」（以下「慣例」）に着目し、義天の出家（1065）から澄儼への国師号追贈（1141）までおよそ八十年に亘る一連の政治過程を、義天及びその門徒を巡る問題に引き付けてできるだけ詳細に跡付け、「慣例」の成立過程を明らかにする。仏教界と王室のどのような利害が一致して「慣例」成立に至ったのかを論ずるものである。

第一節では、先行研究の論点を整理した上で、本章の課題を提示した。

第二節では、従来の研究が想定している「王室が法相宗から華厳宗へと提携先を転換した」という理解の図式が成り立たないことを論じた。

第三節では、本章のキーワードである国師号に関する学術史を整理し、王師・国師制度が高麗の王朝と仏教界とを有機的に結びつけた制度の一つであったことを示すとともに、国師号が伴う実利的側面に注意を促した。

第四節において、文宗による義天の出家が必然的に「慣例」に結実したと看做す従来の研究とは異なり、義天の弟子にして王子僧である澄儼の死を以て「慣例」の成立と考えるべきことを主張する。

第五節、第六節では義天の生涯と政治的立ち位置について整理した。そもそも、義天の政治的立ち位置は時期によって浮き沈みがある。宣宗晩年から献宗即位年にかけての義天は首都の開京を離れた。その後に義天に理解のある強権的な国王である粛宗が即位すると、義天は念願であった天台宗創設や華厳宗内部における理論改革などの高麗仏教界の改革を実施した。しかし、志半ばで義天が亡くなり、五年後に義天及び義天の一派を支援していた粛宗が亡くなると、『続蔵経』作成など不朽の業績を残し、さらに王政を補佐した義天に比肩する人材が現れず、義天の弟子たちは政治的苦境に陥った。

第七節では、義天の塔碑が三回にわたって建立された背景を論じた。

むすびにかえてでは、「慣例」成立は、①義天死後に苦境に陥り、自身の権益を守るために、義天と王室との血縁関係に注目した高麗華厳宗の義天門下と、②李資謙の乱と妙清の乱により仏教界との新たな関係構築を迫られ、華厳宗・禅宗・法相宗に送り込んだ王室出身僧侶を媒介とする仏教界支配の構図を目指した仁宗の利害関係が一致したことが、その要因であると論じた。

第三章「高麗前期における道詵への追贈について」では、伝説的な風水地理説の祖師として、高麗時代から後世まで通時的に広範な階層から信仰されてきた道詵（827～898）を題材とし、特に高麗王朝が王位の正統性を示すために道詵に称号を追贈した点に着目する。

顕宗（在位1009～1031）、粛宗（在位1095～1105）、仁宗（在位1122～1146）に共通の政治的・社会的課題は王位の正統性であり、また、段階を踏んで贈号が高くなることは、課題に対応する王朝の期待の高まりのみならず、道詵と高麗王朝との不可分の補完関係を利用して王朝に取り入ろうとする勢力の成長を示唆する。追贈が行なわれた各時期における高麗の政治的・社会的背景に目配りしつつ、道詵への追贈が高麗社会に及ぼした影響を概観することで、宗教と政治が密接に絡み合っていた高麗の時代的特徴に対する理解を深めていくための基礎作業とする。

第一節では、道詵への追贈を行なった顕宗・粛宗・仁宗の三代に共通する政治的問題として王位の正統性が動揺したことを指摘し、追贈により道詵の権威を認めることは、高麗建国の正統性の再確認であり、祭祀を司る現国王の正統性を示すことができたと論じた。

第二節では、顕宗代に道詵への追贈が行なわれた時代背景と追贈による影響について概観した。顕宗代には旧後百済出身の道詵と旧新羅出身の崔致遠が、それぞれ太祖による高麗建国を予言したことで諡号や階位を追贈されている。このことは、被支配者側（旧後百済と旧新羅）が「三韓統一」（＝朝鮮半島統一）を望み、支配者側（高麗王朝）がそれを是認する、という構図の創造である。その背景として、顕宗の王位の正統性を確立せねばならない当時の危機意識を想定した。

そして、「太祖十訓要」が顕宗代に再発見されたことは、道詵と高麗建国の結びつきが顕宗代に確立したことを意味する。以後の高麗では、道詵に仮託された予言書・秘記類が流行した。それは、顕宗代における道詵の公認を受けて、国家繁栄に託けて王朝へ取り入ろうとした人々の願望が具現化したものであった。

第三節では、道詵への王師追贈を支えた動きとして、新羅時代に活躍した高僧への関心の高まりについて検討した。新羅僧の再評価という現象は、単に教義上の関心のためではなく、過去を利用することで現在において利益を得ることを志向したもので

あった。道詵に仮託された予言書に依拠して行なわれた文宗代の長源亭造立や粛宗代の南京遷都の提言は、新羅僧の再評価に伴う現実的な成果を期待した具体的事例である。

「道詵碑文」が放置されていた国清寺は、義天が新設した高麗天台宗の本山である。国清寺が道詵との密接な関係性を持つようになった背景として、①一行と道詵を媒介とすることで、高麗建国神話の威を借りることができた点、②義天の門弟である翼宗が風水地理に精通した僧侶として知られる点を想定した。翼宗の系列は、義天死後における天台宗の義天一門中最大の派閥となった。

第四節では、仁宗代に道詵を利用して妙清らが台頭した背景、道詵への国師号追贈の影響に関して、人事的観点から分析を加えた。従来は西京遷都との関連からのみ説明されてきた妙清台頭であるが、宗教界の人事的側面から見ると、禅僧の学一の引退を大きな要因とせねばなるまい。仁宗即位年に王師となった学一が、王朝の期待に応えられず、仁宗四年に引退を決意した。その引退が現実味を帯びたことで、後任には学一よりも強力な宗教者が探し求められ、道詵の風水地理説を習得したと称する妙清に白羽の矢が立った。そして、妙清という後任が内定したことで、ようやく学一は引退することが出来たのである。

道詵に対して追贈することで、王朝は高麗建国の正統性を再確認して現国王の正統性を人々に示すことができた。一方で、王朝が道詵を公認したことで、人々は道詵に仮託された予言書・秘記類や呪術を手段として王朝に取り入ることが可能となった。道詵を結び目として両者が不可分な相互補完関係となった契機が、仁宗代における妙清台頭であった。

第四章「大覚国師義天の焼身供養―孝を目的とした捨身」は義天が行なった焼身供養を題材とした論考である。焼身供養はこれまで朝鮮史研究者に注目されてこなかったが、中国や日本の仏教研究において関心が持たれていた現象である。

本章では、高麗国の華厳僧侶である大覚国師義天の行なった焼身供養に注目した。文献上、朝鮮半島において最初に焼身供養を行なったのが義天である。義天は北宋留学前には求法を目的とし、帰国後には亡き父母の供養を目的として焼身供養を行なった。強力な信仰心のもとで自身の身体に火を点ける焼身供養は、一見して孝概念と矛盾する。しかし、義天において両者は矛盾しなかったことが注目される。

義天の焼身供養の目的が入宋前と帰国後とで質的転換を迎えた要因として、『盂蘭盆経』や『梵網経』などの仏典を孝と結びつけて解釈する北宋仏教界の潮流を受容したことに加え、義天自身を取り巻く環境の変化（母の死、及び粛宗即位に伴う両親の供養の国家行事化）を想定した。従来の焼身供養研究は、中国及び日本の事例研究を中心としており、朝鮮半島の事例は検討されていない。研究史上の空白地帯であった

朝鮮半島の焼身供養を検討する本章は、漢字文化圏における焼身供養の伝播や受容を考究するうえで必要不可欠な基礎作業である。

第一節では最初に義天の行なった二種類の焼身供養を概観し、その後に従来論じられてきた捨身の目的と動機について整理した。そして、焼身供養を含む捨身の目的と動機に「孝の実践」を想定する必要を示した。

義天の焼身供養の目的が入宋前と帰国後とで質的転換を迎えた要因として、孝と結びついて仏典を解釈する北宋仏教界の潮流を高麗（及び義天）が受容したことと、義天自身を取り巻く環境の変化が想定される。第二節では前者を論じ、第三節では後者を論じた。

第二節では、元照と義天との思想的交流に着目した。北宋へ渡った義天が直接交流した数多の僧侶のなかでも、元照は義天へ与えた影響が大きい人物の一人である。義天の思想において『梵網経』と『盂蘭盆経』とが孝を軸として結びついていたことは、元照の影響をその一因として想定することができる。焼身供養を推奨する（とされる）経典である『梵網経』が『盂蘭盆経』と孝を媒介として結びついたことは、義天の行なった焼身供養の動機が孝の実践を主眼とするようになる要因の一つであった。

『盂蘭盆経』を孝の立場から解釈する北宋仏教界の議論を受容した義天は、帰国後に亡き両親へ供養を施す際に、『盂蘭盆経』の教説に従い父母を照らすことを目的とした香油錠燭等の布施に満足できず、より上等の供養を行なおうと、自身の腕を燃やすことで、苦行と捨身の功徳を追加し、より手厚い追善としたのである。

第三節では、粛宗代になると義天の焼身供養が粛宗の臨席する国家的行事の一部となったことを示した。このことは孝概念と結びついた義天の焼身供養が、粛宗の王位の正統性を示す装置となったことを意味しよう。

意外なことに、伝統と蓄積のある焼身供養の研究史において、孝の実践を目的とした焼身供養はこれまで検討されていなかった。論者は本研究を通じて、朝鮮史研究が周辺国の歴史研究に新たな視点を提供しうることを改めて確認した。義天の焼身供養を一つのモデルケースとして、今後更なる事例の発見と検討が行なわれることで、漢字文化圏における焼身供養の伝播や受容の様相が明らかとなるであろう。

（論文審査の結果の要旨）

高麗時代（918-1392）の朝鮮半島では仏教が盛行した。王朝は禅宗もしくは華厳宗・法相宗の高僧を国師・王師に任命することで仏教を国制に組み込んだ。高麗史は、武臣のクーデターにより毅宗が廃位される 1170 年を境に前期・後期に分かれるが、本論文は、高麗前期を仏教関連諸制度が完成した時代であり、遡って新羅時代、降って高麗後期・朝鮮王朝時代に研究を進めるための起点と位置づけた上で、王朝と仏教界を媒介するものとしての国師・王師に焦点を当てつつ、高麗前期政治史における仏教の政治的役割を考察するものである。

本論文に関連する先行研究は、戦前においては内藤雋輔・大屋徳城・高橋亨の義天研究、今西龍・李丙燾の道詵研究、瀬野馬熊の妙清の乱研究など主に日本人研究者がこれを担った。これらの研究は意識的・無意識的たるを問わず、朝鮮他律史観・朝鮮停滞史観として日本の朝鮮半島支配を正当化するものであった。戦後の韓国人による研究は、朝鮮他律史観の克服、「朝鮮の独自性」の発見を最優先課題とした。しかしながら、「朝鮮の独自性」を過度に意識した結果、また漢文史料運用能力の一般的な低下から、とりわけ史料の正確な読解や史料の「語り」に無頓着な議論が頻見する現状に陥っている。こうした状況に対する批判的立場から、本論文は、朝鮮内部発展論・「朝鮮の独自性」といった現代的価値観によって看過されてきた側面をも考慮し、高麗前期仏教政治史の分析視野を高麗国内に躊躇することなく、高麗政治の外交的環境や、高麗仏教に対する北宋中国仏教の影響を積極的に検討する。

本論文は序論および本論四章から成る。〈第一章　王師任命と高麗の外交政策：円空国師智宗の生涯〉は、光宗（949-975）および成宗（981-997）・穆宗（997-1009）・顕宗（1009-1031）時代の高麗における外交と仏教の推移に、智宗（930-1028）の生涯を位置づけ、高麗の外交と王師任命に一定の関係があったことを論ずる。〈第二章　高麗における王室出身華厳宗僧侶への国師号追贈の慣例成立について〉は、文宗（1046-1083）および宣宗（1083-1094）・献宗（1094-1095）・粛宗（1095-1105）・睿宗（1105-1122）・仁宗（1122-1146）時代の高麗における王室と仏教界の関係の推移をたどりつつ、義天（1055-1101）にはじまる王室出身高僧への国師号追贈が慣例化する政治史的背景を考察する。〈第三章　高麗前期における道詵への追贈について〉は、顕宗・粛宗・仁宗時代における道詵（827-898）への追贈を手掛かりに、風水思想の浸透過程を追跡し、妙清の乱（1135）の背景を解明する。〈第四章　大覚国師義天の焼身供養：孝を目的とした捨身〉は、義天の焼身供養が、孝を目的とした捨身に転化したことを論じ、その背景として北宋仏教の影響および宣宗から粛宗時代における義天をとりまく政治的環境の変化を解明する。

本論文の成果は、従来の高麗仏教政治史研究が看過した多くの歴史的脈絡を発見し、通説に再考を促したことである。すなわち、第一章では、高麗が宋に事大する時期には、宋で優勢な教宗から、遼に事大する時期には、遼で優勢な禅宗から王師が選

ばれたことを解明する。事大外交の高麗政治史への影響を過小評価する従来の研究姿勢では気付き得ないものである。第二章では、義天が華厳宗に出家したことを契機に王室の提携先が法相宗から華厳宗に交代したとする通説を実証的に退け、また、王室出身高僧への国師号追贈の慣例化を義天ではなく、その後継者というべき澄儼（1090-1141）に始まることを論ずる。第三章では、道詵への追贈を行った顕宗・睿宗は簒奪者、仁宗は叛乱者であった李資謙への譲位を約束したという点で、いずれも王位の正統性が動揺していたため、高麗建国を予言した道詵への追贈で正統性の回復を試みたことを指摘し、最後には叛乱（1135）で自滅する妙清の抬頭は従来、西京遷都運動と関連付けて説明されてきたが、その背景に道詵に仮託された風水思想の浸透があったことを解明する。ついで第四章の主題である朝鮮半島における焼身供養は先行研究が全くないという点で画期的であり、また、義天の孝を目的とした捨身が、『梵網経』と『盂蘭盆経』を結びつけた北宋の元照（1048-1116）の直接的影響にあったことが確認される。ここでは紙幅の都合から、ごく一部しか挙げ得なかったが、同様の創見は随所に認められる。また、仏教を視野に収めることによって、高麗前期政治史におけるいくつかの重大事件について、全く新しい歴史的脈絡からの理解が可能となったことも附言しておきたい。

意欲的な作品であるため、本論文の功績は十二分に評価するものの、なお要望すべき点も少なくない。まずは、背景となる事件や用語の説明が不十分であるため、高麗史の専家以外にはわかりにくい記述が少なくない。また、とりわけ仏典や碑文などについては、解釈になお異論の余地がある。さらに、もっぱら個々の国王と仏教との関係に焦点を当てるが、王朝と仏教との関係を論ずる場合、王后など女性の役割も看過できない。何より、本論文で明らかにされた高麗における王朝と仏教の関係を、東アジア世界においていかに位置づけるかという問題がある。本論文が扱った 10～12 世紀の東アジアに高麗と共時的に存在した宋・遼および金・日本においても仏教は盛行した。とりわけ遼・金や日本の国制において、仏教は重要な役割を果たしていたという印象がある。これらと比較した場合の高麗の独自性・共通性により立ち入った言及があれば、論者が批判する「朝鮮の独自性」を過度に強調する研究の現状を打破する一つの契機となったのではないかと考える。

これらの問題は、もとより本論文の価値を損なうものではない。むしろ、論者自身あるいは論者の研究に触発されたより若い世代に今後の研究課題を提供するものとして積極的に評価したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2023 年 2 月 13 日、調査委員 3 名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。